

平成２７年度教育事業 主体性・社会性をはぐくむ幼児キャンプ
「大自然に“いっぽ”」

1 趣旨

自然を介した学びの場において、幼児の自立心や協調性、感性を育む。また、日常での子育てにつなげられるように、実習や講義を通して幼児期の自然体験活動の意義について保護者の理解を深める。

2 主催

独立行政法人 国立青少年教育機構 国立花山青少年自然の家

3 協力

宮城県蔵王自然の家、宮城県志津川自然の家、山形県神室少年自然の家

4 後援

宮城県教育委員会、栗原市教育委員会

5 期日

(1) 日帰りプレキャンプ

平成２７年 ８月２９日（土）

(2) 本キャンプ

平成２７年 ９月１９日（土）～ ２１日（月・祝）

6 参加対象と人数

幼稚園・保育園年中・年長児 ２０名 と その保護者

7 参加状況

	日帰りプレキャンプ		本キャンプ		計
	男	女	男	女	
４歳児	１	１	２	１	５
５歳児	４	５	４	５	１８
６歳児	４	２	７	２	１５
保護者	１２	５	１４	８	３９
その他	１	２	４	４	１１
計	２２	１５	３１	２０	８８

※ 日帰りプレキャンプ及び本キャンプは基本的には同じ参加者であるが、日帰りプレキャンプ時に欠席者が出たり、本キャンプで参加対象の家族が増加したりしたため、人数が異なる。

※ 「その他」参加者は参加対象の兄弟等家族である。

8 日程

(1) 日帰りプレキャンプ

	8月29日(土)	
午前	子どもプログラム	保護者プログラム
	参加者受付 『はじまりの会』	
	『キャンプ場での自由遊び』	『講話～こころが育つとき』 講師：明治大学教授：星野 敏男 氏
	『みんなでおひるごはん：お弁当』	
午後	『沢遊び』	
	『おやつタイム：スイカ』 『おわりの会』	

(2) 本キャンプ

	9月19日（土）	
午前	子どもプログラム	保護者プログラム
	参加者受付 『はじまりの会』	『子どもとおわかれ』 （希望者は本館へ宿泊、翌日 10:30 本館集合）
午後	『森の自由遊び』 『寝る場所決め』	
夜	『夕食準備・夕食：じゃがいものニョッキ、 コンソメ野菜スープ、ぶどう』 『就寝』	
	9月20日（日）	
午前	子どもプログラム	保護者プログラム
	『起床・洗面』 『朝のつどい：健康観察、体操』 『朝食：かきたまうどん、りんご』 『沢登り』 『昼食：沢でお弁当』	『受付・集合』 『昼食』
午後	『寝る場所決め』 『自由遊び』、『ドラム缶風呂』	『沢登り』 『入浴』
夜	『夕食準備・夕食：手巻き寿司、すまし汁、 トライフル（作成中のもの）』 『就寝：テントナイト、星空ナイト』	『夕食準備・夕食・子育て懇親会：バーベキュー』 『就寝』
	9月21日（月）	
午前	子どもプログラム	保護者プログラム
	『起床・洗面』 『朝のつどい：健康観察、体操』 『朝食：手作りサンドウィッチ、ヨーグルト』 『片付け・荷物整理』 『パーティー準備』	『起床・洗面』 『朝のつどい』 『朝食』 『片付け・荷物整理』 『キャンプ場へ移動』
午後	『みんなで昼食：ニョッキ、トライフル』、『スライドショー上映』、『おわかれの会』	

9 実施状況

〔日帰りプレキャンプ〕

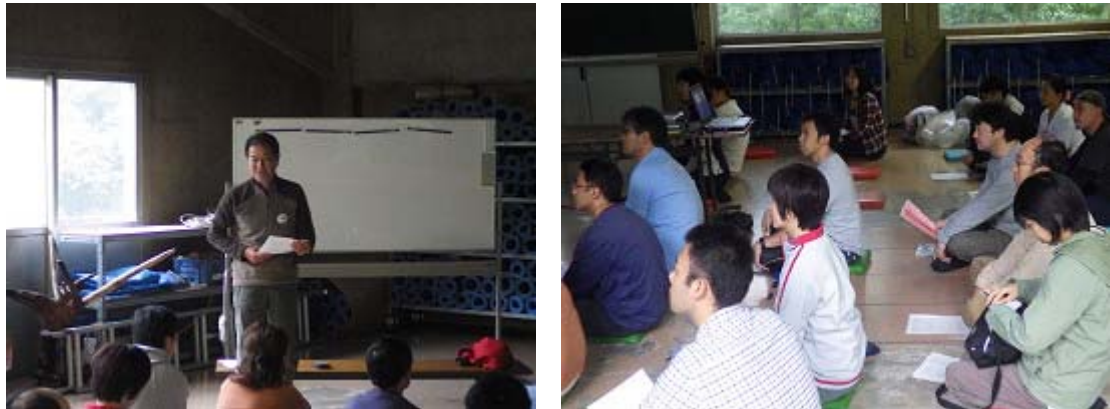
◇子どもプログラム『キャンプ場での自由遊び』

スタッフが遊びの提供（紹介）をすることもなく自由遊びをスタートさせたが、子どもたちは小雨が降る中キャンプ場いっばいに広がり、興味の向くままに行動していた。



◇親プログラム『講話～こころが育つとき』 講師：明治大学教授：星野 敏男 氏

星野先生のゆったりとした語りかけと、自然体験の効果や意義についてのわかりやすい内容に、うなずきながら熱心に聞く保護者参加者の様子がみられた。



◇親子共通プログラム『沢遊び』

ライフジャケットを身に付け、砥沢での親子沢遊びを行った。子どもたちは低い気温、水温にもめげずに沢に入っていった。保護者の方が、おそるおそる沢に入る姿がみられた。



〔2泊3日 本キャンプ：子どもプログラム〕

◇『森の自由遊び（1日目）』

プレキャンプでの「キャンプ場での自由遊び」から、キャンプ場近くの「森での自由遊び」に発展させた。「はかせ」こと、山崎裕先生（尚絅学院大学）の森での遊び方の注意を聞いた後、プレキャンプ同様、興味の向くまま森の中に広がっていった。そのうち、同じ興味を持つ参加者同士が集まって遊ぶ様子がみられた。また、「はかせ」が植物や虫等のような質問にも答えてくれることで、「知りたい」という欲求が満たされ、興味関心がさらに増していくようであった。



◇『寝る場所決め（1日目、2日目）』

1日目には管理棟2階で寝る場所をつくった。グループごと場所を決めて、寝袋や寝袋マット等をセットした。また、2日目にはテントで眠る「テントナイト」と、ビバーク（ブルーシートを用いた野営）の「星空ナイト」について説明を聞いた後、寝る場所を自分で選んだ。



◇『食事作り（1日目の夕食、2日目の夕食、3日目の昼食）』

今回食事作りにおいて、能動的に活動に取り組ませることや、日常生活につなげることを意識して、「マイピーラー」、「マイスポンジ」を各自に持たせた。どちらも小さい手で懸命に扱っている様子が見られた。

1日目の夕食はじゃがいものニョッキづくりに挑戦した。このキャンプでは大事にしている要素の1つに「こねる」があり、毎年食事作りにその要素を取り入れている。そして3日目の昼食会にも同じメニューを取り入れ、繰り返し行うことで子どもたちが技術を習得しやすくするだけでなく、「できるようになった」という達成感を味あわせることをねらった。ただ、あまり身近でないメニューだったので、特に1日目の夕食づくりは、子どもたちだけでなくスタッフも苦労して完成させた。



◇『沢登り（2日目）』

プレキャンプでは沢の環境に親しむ「沢遊び」を行いあまり移動しなかったが、本キャンプでは砥沢の沢②のポイントから沢③に移動する「沢登り」に発展させた。沢登りにしたことで、流れに立ち向かったり、足のつかないところに行ってみたり、自分の足で移動することで変化していく景観を楽しみながら先に進むことができた。ゴール前は足のつかない深みになっており、怖がる参加者もいたが、無事全員がゴールすることができた。ほぼ同じタイミングに、上流で保護者も沢登りを行っており、親子別々に同様の体験をした。その体験の共有によって、キャンプ後の共通の話題づくりや共感しあう場面づくりにつなげようとした。



◇『入浴：ドラム缶風呂（2日目）』、『自由遊び（主な活動の合間に）』

このキャンプでは恒例になってきたドラム缶風呂を2日目に行った。沢登りの後であり、このキャンプ唯一の入浴タイムであり、とても喜んでいる様子だった。自由遊びは主な活動の間に実施した。自然の事物を介した遊びをすることもあれば、鬼ごっこのような仲間同士の遊びをすることもあった。



◇『テントナイト、星空ナイト（2日目）』

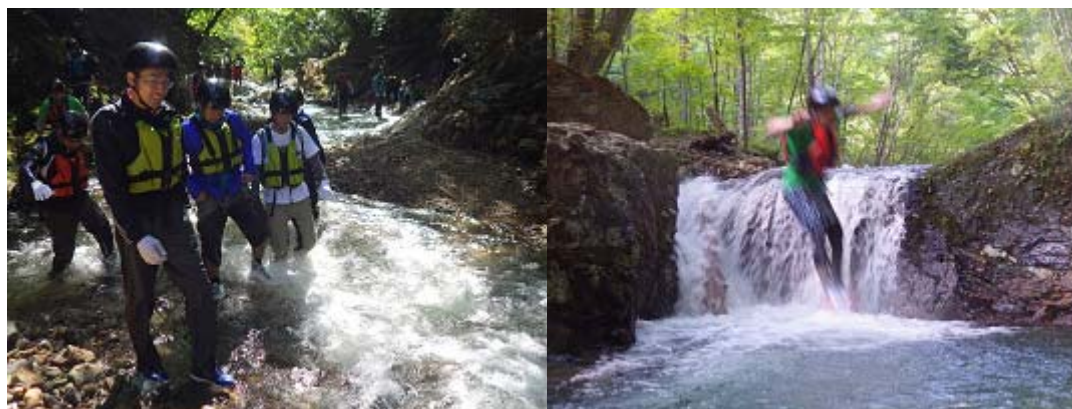
日中説明を聞いて、自分で選んだ方法で眠る準備をした。夜空は満天の星で、まさに星空ナイトを楽しむことができたが、日中思いっきり活動した子どもたちは、初めての野営にも関わらず、次々と眠りについた。テントナイトを選択した子どもたちも、2～3名に分かれて、テントに入り、非日常の空間を楽しんでいるようだった。



〔1泊2日 本キャンプ：親プログラム〕

◇『沢登り（1日目）』

砥沢上流沢⑤～⑩は、さらに起伏に富んだダイナミックな沢登りが実施できるため、保護者参加者は滝壺への飛び込み等、積極的にチャレンジした。



◇『ペーパーウエイトづくり（2日目）』

講師に山田恭子氏を迎え、子どもたちへのプレゼントとしてペーパーウエイトを作成した。保護者参加者は、子どもたちと離れていた時間のことを考えながら、集中して活動に取り組んでいた。



10 事業評価

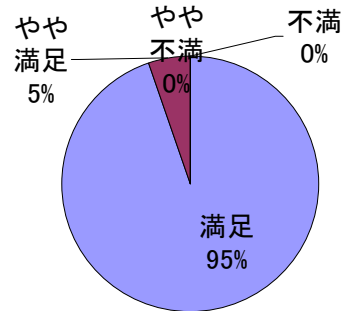
(1) 参加者満足度アンケートから

事業後保護者参加者に回答してもらったアンケート結果では、おおむね高い満足度が得られた。

問1. 事業に参加して感じたこと

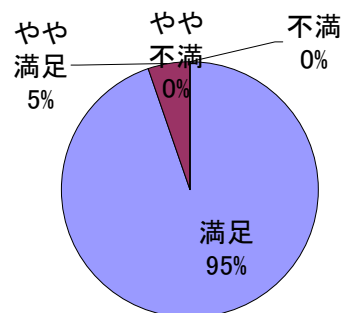
①事業全体を通してはどうでしたか。

- ・昨年度と違った内容も入っており、よかったと思う。
- ・同じようなご家族との交流もできて、とても良かったです。
- ・親もなかなかできない体験ができて、貴重な機会になりました。
- ・毎回新鮮にいろんな体験ができるように企画されていると感じます。
- ・去年から参加していればよかった。
- ・今年のプログラムは最高でした。
- ・子どもについては◎ですが、親企画はなくてもよいと思います。



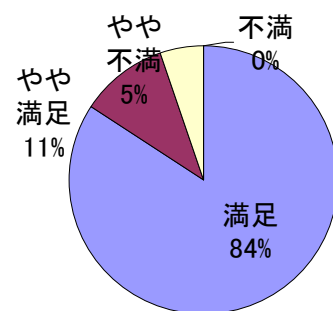
②この事業のプログラムはどうでしたか。

- ・沢登りは童心にかえたようで、最高に楽しかったです。
- ・親がさせてあげられない自然体験をさせられ、非常によいと思います。
- ・沢登り、クラフトともとても良かったです。
- ・沢登り大変よかった。
- ・沢登り最高！



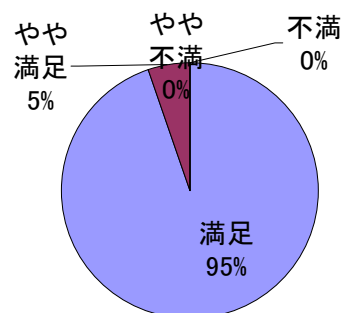
③この事業の運営はどうでしたか。

- ・みなさん一生懸命していただき、安心できました。
- ・とても丁寧な対応がよかった。



④職員の指導・助言はどうでしたか。

- ・わかりやすい説明でよかった。
- ・親切です。
- ・丁寧な対応、指導だったと思います。



(2) 効果測定調査結果

今回キャンプの効果を測定するために、幼児期における自然体験活動の効果を測定できる尺度の作成を進めている国立立山青少年自然の家で作成した全93項目を使用した。調査時期は、本キャンプ実施前を「事前」とし、本キャンプ実施1週間後を「事後」、本キャンプ実施1ヶ月後を「1ヶ月後」として、子ども参加者の保護者（3回とも同じ回答者）に依頼した。93項目について事前、事後、1ヶ月後それぞれ平均値を算出し、比較した。その際、統計的処理（分散分析及び多重比較）を行っており、平均値の差を検定している。なお、表1～3の「分散分析値」と「有意差確率」はそれによって得られたものである。

得られた結果から、93項目中20項目は事前～事後に数値の向上がみられ、なおかつ事前～1ヶ月後にも数値の向上がみられた（表1）。つまり、20項目については、キャンプ直後に意識の変容がみられ、1ヶ月後まで持続したと捉えられる。また、20項目のうちには、今回のキャンプの目標である「家族と離れたキャンプを通して自然の中での体験活動に挑戦し、自分のことは自分でやろうとする気持ちを持つ」と同意義を含む、「人に頼らず、自分のことは自分でしようとする」、「自分で出来ることは自分でする」といった項目が含まれており、それら数値がキャンプ直後に向上し、1ヶ月後にも持続しているということは、このキャンプの目標が達成できたといえる（図1）。

表1 事前～事後、事前～1ヶ月後に数値の向上がみられた20項目

	平均値			分散分析値	有意差確率
	事前	事後	1ヶ月後		
9 身の回りの整理整頓ができる	1.750	2.600	2.833	13.838	***
32 電気やガスがある普段の生活のありがたさを知っている	1.421	2.500	2.667	21.526	***
33 新しい友達を作ることが得意である	2.263	2.950	3.056	5.299	**
34 山登り、木登りなど、外で体を使って遊ぶことが好きである	2.842	3.450	3.500	4.899	**
36 家族に対して感謝の気持ちをもっている	2.211	2.850	3.056	6.858	***
38 人に頼らず、自分のことは自分でしようとする	2.105	2.900	3.056	7.229	***
40 歩く事を嫌がらない	2.684	3.350	3.500	6.566	***
42 自然の中でどんな危険があるか知っている	1.737	2.750	3.000	19.369	***
44 気温や天気を考えて、自分で衣服の調整をすることができる	2.105	2.850	2.889	5.236	**
46 次の予定の為に、何が必要か、自分で考えられる	2.053	2.850	2.889	7.290	***
47 時間を見て、自分で行動することができる	1.632	2.450	2.611	10.933	***
48 自分のことだけでなく、他の人のことも考えて行動ができる	2.105	2.750	3.167	9.552	***
51 環境に配慮した行動がとれる	2.316	2.900	3.056	6.206	***
57 毒などの害がある生物や植物を知っている	1.421	2.150	2.389	9.364	***
58 自然に対して畏敬の念をもっている	1.947	2.600	2.778	5.559	**
61 登山などをしても疲れない体力がある	2.421	3.250	3.333	6.431	***
66 苦手な物事でも、逃げずに向かっていくことができる	1.947	2.750	3.056	9.834	***
72 山の中など足場の悪い所でも上手に歩くことができる	2.579	3.250	3.389	6.217	***
82 人の話をしっかりと聞くことができる	2.550	3.200	3.235	4.190	*
87 自分で出来る事は自分でする	2.550	3.200	3.353	8.517	***

***p<.001 **p<.01 *p<.05

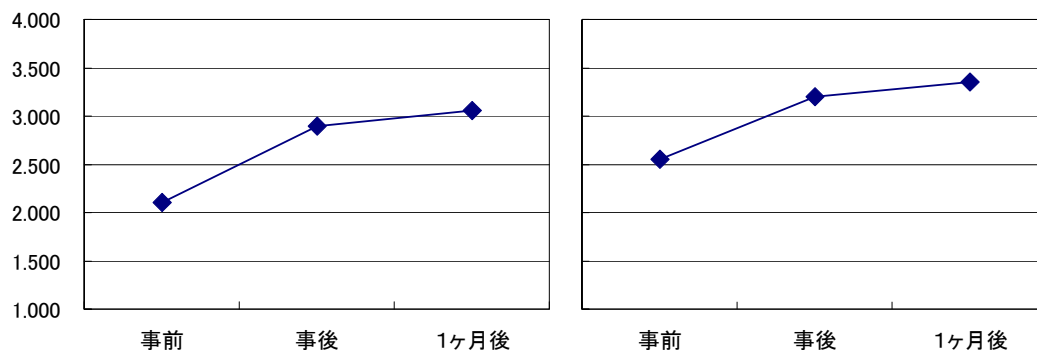


図1 「人に頼らず、自分のことは自分でしようとする」(左)、「自分で出来ることは自分でする」(右)

また他には、「電気やガスがある普通の生活のありがたさを知っている」、「山登り、木登りなど、外で身体を使って遊ぶことが好きである」、「自然の中でどんな危険があるか知っている」、「環境に配慮した行動がとれる」、「毒などの害がある生物や植物を知っている」、「自然に対して畏敬の念を持っている」、「登山等をしていても疲れない体力がある」、「山の中など足場の悪いところでも上手に歩くことができる」といった、自然の中で活動することによってもたらされた変容と捉えられる項目が挙げられる。それら項目の内容に意識の変容がみられ、1ヶ月後まで持続しているということは、当所が立地する自然環境と、指導・支援をいただいた講師の先生、それらを巻き込んだプログラムがもたらした効果と言っても過言ではない。

他にも、19項目が事前～1ヶ月後に数値の向上がみられた。それについては、数値だけみると事後にも向上しているが、検定の結果、明らかな意識の変容は1ヶ月後にみられたことになる（表2）。そのうち、「朝、自分で起きることができる」、「すすんで人の手伝いができる」、「着替えや洗面用具等を自分で用意することができる」等は、キャンプ中から日常生活に戻った時にも引き続き実践できるようになることをねらっていた。それらが事後には変容がみられなかったとはいえ、1ヶ月後に数値が向上していたことは、今回のキャンプの取組が影響している可能性が高い。

表2 事前～1ヶ月後に数値の向上がみられた19項目

	平均値		1ヶ月後	分散分析値	有意差確率
	事前	事後			
1 花や風景などの美しいものに感動することができる	2.950	3.200	3.556	5.786	**
8 朝、自分で起きることができる	2.550	3.150	3.278	3.579	*
10 一つのことをやり通すことができる	2.450	2.850	3.222	4.777	**
17 自分の思いを我慢して、相手に譲ることができる	2.400	2.900	3.111	4.365	*
31 すすんで人の手伝いができる	2.421	2.950	3.278	6.426	***
37 節電や節水を心がけている	1.947	2.450	2.944	6.737	***
39 自分勝手な行動をしない	2.053	2.600	2.944	5.247	**
45 善悪の分別がつく	2.895	3.250	3.556	5.473	**
52 虫などの生き物を、必要以上に嫌がらない	2.789	3.150	3.500	3.914	*
53 自然のこわさやきびしさを知っている	2.211	2.700	2.889	3.735	*
56 食物連鎖などの自然の生態系に興味をもっている	2.000	2.400	3.000	7.247	***
59 自分の行動を周りの人に合わせることができる	2.368	2.850	3.333	8.022	***
64 着替えや洗面用具等を自分で用意することができる	2.158	2.950	3.111	4.788	**
67 何事にも、一生懸命取り組む	2.684	3.300	3.389	3.697	*
70 物を大切にする	2.263	2.850	3.000	4.022	*
74 思い通りにならないときに、イライラしない	1.842	2.400	2.611	4.744	*
75 自然を大切にすることをしている	2.526	2.950	3.333	6.876	***
84 「おはよう」「ありがとう」などのあいさつがきちんとできる	2.950	3.350	3.588	3.547	*
88 小さなケガなどは我慢することができる	2.850	3.200	3.412	3.716	*

***p<.001 **p<.01 *p<.05

次に、6項目は事前～事後に数値の向上がみられたが、1ヶ月後には変化がみられなかった（表3）。このことは、直後には意識の変容がみられたが、1ヶ月後まで持続しなかったということになる。項目をみると、「早寝・早起きである」、「ひとりで寝ることができる」、「親から離れていても、不安にならない」、「ひとりでお風呂に入ることができる」とあり、2泊3日家族から離れて生活、活動を成し遂げた子どもたちがそれらの自信をつけたことは容易に想像できる。そしてそれが持続しなかったことも、改めて家族との居心地の良い暮らしに戻ったならば、薄れていくのも仕方ないことのように感じられる。つまりその項目の内容から、幼児には年齢的、発達段階的にまだ定着しなくてもよいものもあるとも考えられるので、今後年齢や今回のような経験を重ねることで、しっかり定着していくことが期待できる。

表3 事前～事後に数値の向上がみられたが、1ヶ月後には変化がみられなかった6項目

	平均値		1ヶ月後	分散分析値	有意差確率
	事前	事後			
24 早寝・早起きである	2.368	3.150	2.944	4.078	*
30 ひとりで寝ることができる	2.158	3.000	2.889	3.842	*
55 親から離れていても、不安にならない	2.211	3.150	2.944	5.673	**
63 ひとりでお風呂に入ることができる	2.053	2.900	2.667	3.398	*
77 少々のことではへこたれない	2.579	3.200	3.111	3.690	*
78 自分の思いを相手に伝えることができる	2.632	3.300	3.222	3.861	*

***p<.001 **p<.01 *p<.05

11 成果と課題

(1) 平成27年度の「大自然に“い〜っぽ”」の目標と作戦

プログラムの企画運営のため、指針となる目標、それを達成するための作戦を設定した。

①「大自然に“い〜っぽ”」の目標

〔子ども〕

家族と離れたキャンプを通して自然の中での体験活動に挑戦し、自分のことは自分でやろうとする気持ちを持つ。

〔保護者〕

幼児期の自然体験活動の意義について理解を深め、自然体験を通して思いを共有しながら子どもの成長を見守る。

②目標達成に向けた平成27年度の作戦

〔子ども〕

子どもたち自身の「やりたい」という強いエネルギーを運営や支援に利用する。

作戦その1 「やりたい」という欲求が起こるような仕掛けを工夫する。

作戦その2 活動にも選択肢を設け、自分で選ばせる。

〔保護者〕

子どもたち自身の「やりたい」という気持ちが強いエネルギーであり、それを活用することのよさに気づいてもらう。

作戦その1 キャンプでやったことが日常生活につながるように仕組む。

(2) 成果

- ・(1)に提示したように目標やそれに伴う作戦を設けたことで、プログラム作成の観点が明確になった。そのため、プログラムの急な変更をする際にも、何を優先するかがはっきりしていて組み立てやすい等利点が挙げられる。したがって、これまでの実践に加えて、次年度以降も引き続き取り入れていきたい。
- ・プレキャンプの講話を講師に依頼する際に、本キャンプに向けて保護者のやる気が出る話を、と依頼したところ、「プレキャンプで自然の中で過ごす大切さを講話で学び実感して楽しみに参加しました」という保護者の感想が本キャンプ後に得られ、企画側のねらいが参加者に伝わったことがわかった。加えて、本キャンプで依頼した、子ども、保護者それぞれのプログラムの講師についても本企画のねらいに沿った指導、支援をいただき、プログラムの意図に合致した講師を招けたことは、目標の達成に大きく影響している。

(3) 課題

- ・「主体性・社会性をはぐくむ幼児キャンプ大自然に“い〜っぽ”」は11年目を迎え、その都度担当者が様々なプログラムを実践してきた。それによって、成果の得られた活動プログラ

ムや運営方法が蓄積されており、すべてを組み込もうとすると盛りだくさんになりすぎてしまう。これまでの蓄積を考慮に入れつつも、その年の担当者の意向をはっきりと打ち出し、取捨選択をする必要がある。

- ・すでに山形県神室少年自然の家とは同事業名で実施する等連携協力を進めてきたが、その他の施設等との連携協力についてはまだ広がりには欠ける。幼少期からの教育支援に着目している施設は近隣にも多く見受けられるので、連携協力することでより効果の高いプログラムがお互いに提供でき、結果的にそれぞれが立地している地域に貢献できるようになると考えられる。またそのようなムーブメントをおこすことで、幼少期からの教育支援の大きな広がりが期待できる。そのためには、本事業の企画を早い段階に立ち上げ、連携協力先を募っていく必要がある。

12 担当者考察、今後の展望

(1) プログラムの企画運営について

- ・夜の時間がおしてしまい、就寝時間にまでかかってしまったのは食事作りが少し複雑だったことが大きな原因であると思う。そのことも含め、幼い子どもたち対象なので、いろいろとそぎ落として、全体的にもっとシンプルな運営にすべきだった。それについては、これまでの担当者が様々な魅力的な取組やプログラムを実施しており、それらを取捨選択していかなないと盛りだくさんになりすぎてしまうと感じた。
- ・目標を達成するための作戦として、「選択肢を設ける」ということをやってみてよかった。年中児、年長児でも、あるいはだからこそ、他者に流されずしっかりと選択できることがわかった。「やってみたい」と思った子が迷った末、星空の下ビバークに挑戦できたということだけでも、この試みをやってみてよかったと判断できる。

(2) 講師について

- ・子どもプログラム講師の山崎先生の存在が大きかった。「はかせ」として、子どもたちの知識欲を満たすだけでなく、ほどよい安全管理、そして運営面にも大きく関わってもらった。今回依頼した講師の方々にはこちらの意図をしっかりとくみとった支援、指導をいただいた。講師の力によるところが大きいため、今後も依頼することを前提にしつつ、講師が代わっても質が落ちないようにしっかりとした講師との連携体制を築く必要がある。

(3) 調査結果について

- ・保護者満足度アンケートでよい感触だった。また、効果測定についても、キャンプの目標が達成できているといえる項目の数値が向上しており、本事業が参加者の意識の変容に影響を及ぼしたと言える。つまり、今回のキャンプが、子どもたちの意識や態度が変わるぐらいの刺激になり得たと考えられる。

(4) 参加対象者以外の子ども参加者について

- ・第1子だけでなく、それ以外の子どもを持つ保護者の参加を促せるため、参加対象者の兄弟の参加を認めることは今後も欠かせない。しかし、様々な年代の子どもたちが連れて来られるため、その対応（特に野外活動時）が難しい。条件の幅を広げて多くの方に参加しやすくするためにも、対応について今後も模索していく。